

第15回

第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

老荘思想 ～大いなる道～

今回学ぶこと

老子・荘子の思想について、それぞれの特徴を理解する。その際、儒家思想と対比させて、「道」についての考え方の違いを明確にとらえる。老子の無為自然、荘子の逍遙遊といった態度を、実例に当てはめて考える。また、道家思想が後世に与えた影響について理解する。



講師

和田倫明

■ 「無為自然」と老子の思想 ■

老子は諸子百家の一人であり、実在するとすればおそらく孔子より少し後の時代の人物と思われる。

「大道廢れて仁義有り。知恵いでて大偽有り、六親和せずして孝慈有り、国家昏乱して忠臣有り」というように、老子は孔子の儒家思想を批判している。親孝行とか忠臣とかいうものは、身内の仲たがいや国政の乱れがあるからこそ言われることである。本来あるべき「大道」が失われたからこそ、儒家思想で強調される「仁義」が必要になるという。

その「大道」とは、これがその道だ、と言えるようなものではないのであって、仁義のような人為の在り方に従うのではなく、ものごとの本来の在り方、つまり自然に従うことである。これを「無為自然」という。その生き方は「上善如水」つまり水のように争うことなく恵みをもたらすありさまであり、「柔弱謙下」つまり争いごとをせずにへりくだることである。

■ 「万物斉同」と荘子の思想 ■

荘子はわかりやすい例えばなしによって道家思想を説く。あまりにも巨大にして長寿の鵬は、あまりにも高みを飛んでいるから、見下ろした世界は青一色にしか見えないだろう。一方でセミや小鳩は、短命すぎて季節や歳月も知らず、小さすぎて世界のこともわからないのに、鵬をバカげた存在だと笑っている。荘子は、この鵬の視点から考えようとする。

彼によれば、逍遙遊、つまりあてもなくぶらぶらしているということが、本来の在り方であると考え。[胡蝶之夢^{こちょうのゆめ}]のたとえばは、自分が夢の中で蝶になったのか、蝶が夢の中で自分になっているのか、どちらとは決め難い、だからどちらと決めることもない、という。これは[万物齊同^{ばんぶつせいどう}]という見方である。つまり物事には区別や差別などはなく、すべては等しい価値を持つということである。

■ ■ 老荘以後の思想 ■ ■

儒家思想と道家思想は、対照的な考え方をするものであるから、ともに後世に受け継がれ、さまざまな影響を与え続けてきただけでなく、お互いにも影響を与えあってきた。中国に伝えられた仏教にも影響を与えた。

現代に至っても、西洋思想の行き詰まりに際して再発見され、タオイズムとして知られるようになった。

◆ コラム ◆

『莊子』は『老子』の十倍以上の分量があるが、いろいろな人物が登場し、奇想天外な短い物語が次々と語られるので、読み飽きることがない。至楽篇第十八では、莊子が髑髏^{どくろ}と対話する。

旅の途中、髑髏^{どくろ}を見つけた莊子は、馬の鞭でつつきながら「おまえは欲望をむさほり果てたのか、不忠不孝を罰せられたのか、はたまた飢え凍えの災難を受けたのか」と語りかける。そしてその髑髏^{どくろ}を枕にして眠ってしまうと、夢の中に髑髏^{どくろ}が現れた。「おまえが挙げた事柄は生きているうちの心配ごとだ。死んでしまえば、そんなことで煩わされることもない。どんな王者の楽しみも、死の世界の楽しみにまさるものはない。」というので、莊子が「それなら私が死者の神に頼み込んで、生き返らせてやろうと言ったら？」と尋ねると、「人生の労苦をもう一度繰り返すなど、とんでもない！」と、嫌そうに眉をひそめて答えたという。

それにしても、髑髏^{どくろ}の嫌そうな表情というのは、どんなものなのだろうか？